

# アンドリュー・ドブソンの緑の政治理論

——政治的イデオロギーとしてのエコロジズム——

栗 栖 聡  
(徳島大学総合科学部)

- 一 はじめに
- 二 エコロジズムと環境主義
- 三 エコロジズムの構成と分析
- (一) 政治的イデオロギーの機能要件
- (二) エコロジズムの構成と分析
- 四 エコロジズムと緑の政治
- 五 おわりに

## 一 はじめに

政治理論の言説の内部において、とりわけ一九九〇年代に入ってから、エコロジ―問題に関する言説を一つの

政治的イデオロギーとして取り扱う動きが目立っている。この時期に公刊されたイデオロギー研究の論集の多くが、エコロジー問題にかかわる言説に単独の章を充て、既存のイデオロギーと同格の地位を与えるようになってくる<sup>(1)</sup>。従来この種の論集においては、自由主義、保守主義、社会主義、社会民主主義、民主主義、アナーキズム、ナショナリズム、ファシズムなどが検討の対象となるのが通例であったが、近年はそれに加え、フェミニズムと並んでエコリズムが新たに取り上げられることが多くなっている。こうしたことは、エコロジー問題にかかわる言説が、二〇世紀後期に新しく誕生したイデオロギーとして、政治理論の中で急速に市民権を獲得しつつあることを意味している。

同様に、九〇年代になって、エコロジー問題に政治理論の立場から本格的に取り組む著作が続々と登場してきている。例えば、エイドリアン・アトキンソン『政治的エコロジーの原理』（一九九一年）、ロビン・エッカーズレー『環境主義と政治理論——エコ中心のアプローチに向けて』（一九九二年）、ロバート・グッディン『緑の政治理論』（一九九二年）、ティム・ヘイワード『エコロジカルな思想』（一九九四年）、ジョン・ドライゼック『地球の政治学——環境的言説』（一九九七年）、ダグラス・トーガソン『緑の政治の可能性——環境主義と公共圏』（一九九九年）、アラン・カーター『ラディカルな緑の政治理論』（一九九九年）、ブライアン・バクスター『エコリズム』（一九九九年）、ジョン・バリー『緑の政治再考——自然、徳、進歩』（一九九九年）、ジェームズ・ラドクリフ『緑の政治——独裁か民主主義か』（二〇〇〇年）などを挙げることができる<sup>(2)</sup>。もとよりこれらの著作の問題意識や分析視角は必ずしも同一ではないが、そうした違いを超えて、緑の政治理論とも呼ぶべき一つの理論分野が誕生しつつあるのをそこに見て取ることができるであろう。

こうした中で、一九九〇年に公刊されたアンドリュー・ドブソンの『緑の政治思想』は、これら一連の動きが開始され、加速される契機の一つとなった重要な先駆的著作である<sup>(3)</sup>。ドブソンは同書において、エコリズムが、政治的イデオロギーであるために必要とされる要件を充たしており、自由主義、保守主義、社会主義とい

った既存の政治的イデオロギーに匹敵する、それ自身独立した一つのイデオロギーたりうることを確認しようとして試みている。そして、現代の産業社会を成り立たせている政治的・経済的・社会的・テクノロジー的基盤に対して、エコロジズムがどのような挑戦を企てているのかを明らかにし、その挑戦が持つ意味を確定しようとしている。ドブソンのこの著作は、今後の緑の政治理論の展開にとって、肯定的にあるいは批判的に言及されるにせよ、少なくとも議論の前提として踏まえるべき古典となりうるであろう。

我々がかかる重要性を有する『緑の政治思想』について、具体的検討を加えたい。ただその場合には、二つのアプローチが可能であるように思われる。すなわち、第一は、ドブソンがエコロジズムを政治的イデオロギーとして取り扱うことの意味、つまり、彼の分析視角に焦点を絞るものである。第二は、ドブソンが記述し評価するエコロジズムの内容それ自体を対象とし、それがエコロジ問題の解決やそのための社会変革とのかかわりで有する意味を問うものである。第二のアプローチに関しては稿を改めて論じることとし、本稿において我々は、第一のアプローチを採用する。ドブソンは、なぜ政治理論の中でも特にイデオロギー研究と言う文脈でエコロジズムを論じようとしているのか、政治的イデオロギーを彼はどのように規定しているのか、さらに、エコロジズムをどのように構成ないし分析しているのか、こうした論点を巡って以下考察が進められるであろう。

## 二 エコロジズムと環境主義

『緑の政治思想』は、以下のような書き出しで始まっている。「本書は、環境にかかわる諸理念を問題とするが、しかし環境に関係して存在しうる理念なら何でも扱うというわけではない。わたしの主要な目的は、一つのイデオロギーであると適切に見なし得るような環境に関する諸理念のまとめ、すなわちエコロジズムというイ

デオロギーを、記述し評価することにある<sup>(4)</sup>。「ここには、同書全体を貫くドブソンの基本姿勢が明確に述べられている。すなわち、環境にかかわる言説を総体として一つの政治的イデオロギーとして認定することを拒否し、この言説をイデオロギーとして認定しうるものと認定しえないものとに分離し、前者のみを分析の対象とするという姿勢である。ドブソンは、両者を分析上混同しないために、前者に対して「エコロジズム(ecologism)」という名称を付与し、後者を「環境主義(environmentalism)」と呼ぶことによって概念上の区分を行った上で、『緑の政治思想』の分析の対象はあくまでもエコロジズムに限定されていることを繰り返し強調するのである。

ドブソンによれば、イデオロギー研究においては、イデオロギーであるための要件をどの程度の水準で要求するかによって、厳格主義者(maximalist)と非厳格主義者(minimalist)との立場の相違が生まれ、それに対応する形でイデオロギーに対する二つの分析アプローチが存在する<sup>(5)</sup>。エコロジズムと環境主義を区別し前者のみを分析の対象とするというドブソンの構えは、これら二つのアプローチの内の厳格主義者のそれを選択することを意味している。

厳格主義者は、ある言説が政治的イデオロギーであるための要件として、厳格な基準をクリアすることを要求する。その結果、そのような基準を達成しうるもののみが、政治的イデオロギーとしての資格を付与され、そうでないものは排除されることになる。このアプローチの利点は、環境に関する言説を純化することによってその特徴を際立たせ、内的一貫性を有する統一体としてイデオロギーを提示できること、またその結果、他のイデオロギーとの差異を明確にできるという点にある。

ドブソンによれば、あるイデオロギーが同一性を保持するためには、他のイデオロギーから自分自身を区別することを可能にする幾つかの中核となる教義を有すること、並びにそれらの教義が互いに一定の関係の下にあることが必要である。すなわち、イデオロギーとは、それを取り去ってしまえばもはやそれがイデオロギーではあり得なくなるような複数の根本的教義を要素として持ち、同時にそれらの要素を一定の関係性の下に置く、一つ

の思考のシステムなのである。これら要素間の関係は多少の矛盾や曖昧さを内包していてもよいが、だからといって、他のイデオロギーの要素を矛盾なく受け入れるほどに緩やかであってはならない。ドブソンは、エコロジズムがこのような思考のシステムとして存在していることを明らかにしようとしているのである<sup>(6)</sup>。

それに対して非厳格主義者のアプローチの場合には、政治的イデオロギーであるための要件としての基準の数が少ないか、あるいは基準自体があまり厳格ではない。その結果、環境に関する言説に広く網をかぶせることになり、現実に存在している多種多様な立場をイデオロギーの内部に包含することができるといふ利点を有する。そこでは、イデオロギーたりうるエコロジズムとたりえない環境主義という区別は問題とならず、環境に関する言説全体がエコロジズムという一つのイデオロギーと見なされた上で、両者の区別はこのイデオロギー内部における急進派と穏健派（あるいは左派、中道、右派）といった形で理解される。したがってこのタイプのアプローチでは、急進派から穏健派までの様々な立場が、イデオロギーの研究ではおなじみの政治的スペクトラム上に配列され、検討されることになる。

それでは、エコロジズムと環境主義を区別するという目的は、厳格主義者のアプローチを採用することによって一体どのように達成されるのであろうか。まずここで、ドブソンがエコロジズムと環境主義をそもそものようなものと考えているのかを簡単に見ておくことにしたい。ドブソンは言う。

環境主義は、現在の価値観あるいは生産と消費のパターンを根本的に変化させなくとも、環境問題を解決しようという信念を持っており、それゆえ、環境問題に対する管理的アプローチに賛同している。それに対してエコロジズムは、我々と人間以外の自然界との関係や、我々の社会的、政治的生活様式のラディカルな変化があつて初めて、永続可能で満足感のある生存が可能となると考えている<sup>(7)</sup>。

この両者の差は、穏健派と急進派の差として理解されるべき問題、すなわちラディカルさの程度の問題というレベルを越えており、それゆえこの差は、質的な違いとして理解される必要があるというのが、ドブソンの主張である。それはある意味で問いの深さの違いと言うことができる。つまり、両者は、環境問題の原因を把握し問題を解決しようと試みる点で共通であるにしても、どのようなレベルでその原因を探るかという点で基本的に異なっている。そしてその原因をより根源的に（ラディカルに）把握するにつれ、現在の社会を変革するという点でより急進的に（ラディカルに）なるであろう。

環境主義は、社会それ自体の変革の必要性を認識せず、技術的対応を中心とする環境への配慮といった程度の意味しか持たない。それゆえ、環境主義的自由主義、環境主義的資本主義、環境主義的社会主義、環境主義的全体主義といったように、どのような政治的イデオロギーにも形容詞として奉仕することができる。それに対して、エコロジズムは、資本主義や社会主義とは相容れないそれ独自の一連の教義を有しているため、他のイデオロギーの形容詞とはなりえない。そして、それはとりわけ、産業革命以降の近代社会すなわち産業社会に対する根源的批判を内包している。ドブソンが独自のイデオロギーとしてエコロジズムを把握しようとする根本的な理由は、それが有するこうした批判の根源性と広範な射程を明確に浮き彫りにすることにあると言えよう。換言すれば、エコロジー問題への対応は、近代社会の大規模な変革を要請する包括的な政治的イデオロギーのレベルでの対応を必要とするとの認識があるのである。

### 三 エコロジズムの構成と分析

#### (一) 政治的イデオロギーの機能要件

ドブソンが採用する厳格主義的アプローチは、政治的イデオロギーであるための要件として、厳格な基準を適用するわけであるが、それではその基準とは具体的に何なのであるか。彼は、イデオロギーの機能主義的定義に依拠することによって、イデオロギーが果たすべき三つの機能に着目している。それは、第一に、社会についての分析的記述、第二に、特定の社会形態の処方、第三に、政治的行動のためのプログラムの提示である。エコロジズムがこれらの機能要件を充たしうるか否かが、ドブソンの『緑の政治思想』の主たる検討課題である。

### (1) 社会についての分析的記述

イデオロギーは、己れが直面している問題が何であれ、それを「特定の社会的実践の偶然的な現れとしてではなく、人間の条件の特定の根本的で（いわば）必然的な現れとして分析」<sup>(8)</sup>する。ドブソンが挙げている例で言えば、例えば社会主義は、劣悪な労働条件や低賃金や失業という現象を解決すべき問題とするが、それを特定の資本家の資質であるとか資本主義の一時的な機能不全といった偶然的な現れとしてではなく、資本主義それ自体がもたらす必然的な現れとして分析する。

同様に、エコロジズムは、様々な環境問題を解決すべき問題とするが、それぞれを切り離して原因を特定し個別に対処策を施すべき偶然的・例外的現象とは考えず、産業主義それ自体がもたらす必然的な現れとして分析する。エコロジズムは、自らが発見した人間社会の存立基盤に関わる「真理」に基づいて社会を記述することを試みるのであり、それは同時に、そのような真理を理解していない産業社会に対する批判でもあり、さらには様々な環境問題の根本的原因を析出することでもある<sup>(9)</sup>。

### (2) 特定の社会形態の処方

イデオロギーは、己れが直面している問題に対して、その解決法を処方しなければならない。その処方、単なる技術的な調整と言った類いのものではなく、人間の条件に関する先の真理に立脚したあるべき社会形態を提示するものでなければならぬであろう。したがって、エコロジズムがイデオロギーでありうるためには、それ

独自の観点から構想された何らかの理想の社会、緑の社会の見取り図を具体的かつ総体的に提示するものでなければならぬであろう。

### (3) 政治的行動のためのプログラムの提示

イデオロギーは、自らが処方したあるべき社会の実現に向けた政治的行動のためのプログラムを提示しなければならぬ。すなわち、提示したあるべき社会が単なる理想ではなくて到達可能なものであることを示すために、「ここ（否定されるべき社会）」から「そこ（理想的な社会）」へと至る具体的な移行戦略、移行の道筋を明確化しなければならない。エコロジズムがそうした移行戦略を有しているかどうか、また有している場合その特徴はどのようなものが検討課題となるであろう。

### (二) エコロジズムの構成と分析

ドブソンは、『緑の政治思想』において、上述のイデオロギーの機能要件を基準とすることによって、エコロジズムをイデオロギーとして構成し、分析を加えようとしている。ここであらかじめ断っておくべきことは、エコロジズムというイデオロギーが分析の対象として既に存在していて、それをドブソンが分析しているわけではないということである。事態は逆であって、エコロジズムという統一的イデオロギーが不在であり、そのこと自体が問題であるという認識があるからこそ、ドブソンは自覚的にエコロジズムを「理念型」として「構成する」作業を開始したということなのである。その作業の過程でドブソンは、イデオロギー分析にかかわる幾つかのレベルにおける差異（及び同一性）を十分意識しながら、エコロジズムを構成し分析しており、ゆえに、我々は『緑の政治思想』の読解にあたって、その都度ドブソンがどのレベルで議論を行っているかに自覚的であればならぬであろう。それではそのレベルの異なる差異とは何かについて、以下で論じることにした。



(1) イデオロギーとイデオロギーたらざるものとの間の差異

既に見たように、ドブソンが強調しているエコロジズムと環境主義の差異は、このレベルにおける差異である。非厳格主義者は、このようなレベルでの差異を認識していないので、両者の差異を同一のイデオロギーの内部の差異と理解している。このような理解が生じるのは、イデオロギーの同一性を、言説の客体の同一性として把握しているからである。同じように環境問題に関して語っているのだから、当然に同一のイデオロギーであつて、たとえ違いがあるにしても、それは程度の差であらうという判断である。それに対して、ドブソンは、同じ客体について語っているという事実は必ずしもイデオロギーとしての同一性を担保するものではなく、むしろその客体について語る語り方自体の違いがイデオロギーとそうでないものの間に生み出す分割線の方が、重要な意味を持つと考えている。この分割線を生み出すものが、イデオロギーの機能を果たしうるものか否かという基準である。

イデオロギーとイデオロギーたらざるものとの差異に着目する時現れる同一性は、イデオロギーであるものの同一性とイデオロギーたらざるものの同一性である。すなわち、自由主義や社会主義、そしてエコロジズムは、イデオロギーとして相互に対立するであろうが、少なくともそれがイデオロギーであるという点において、同一の集合に属する要素であり、同一性を有する。他方で、環境主義はイデオロギーたりえないものという要素からなる集合に帰属しており、その意味で、例えば（科学的社会主義が言うところの）空想的社会主義の仲間なのである。それゆえ、同一の対象について語っていると言う面で同一性を有するように見えた環境主義とエコロジズムは、イデオロギーか否かという差異から見れば、異なった次元にある極めて遠い存在となる。

この差異を軽視して両者を混同してしまえば、環境主義がエコロジズムの中核的教義の純粋性を毀損する可能性があり、この意味において、環境主義は、明確に異なる教義を有する他のイデオロギー以上にエコロジズムにとって有害なものとなりうる。それゆえ、ドブソンは、環境主義はエコロジズムの最も近くに位置するように見

えて、最も遠くに存在していること、あるいは、環境主義が他のあらゆるイデオロギーに形容詞として付加できるのに対し、エコロジズムとは最も折り合いが悪いことを、強調しているのである。

したがって、このレベルの差異を認識しつつ行われる実際の作業は、エコロジ問題にかかわる多種多様な言説を精査し、エコロジズムの構成要素たりうるものとそうでないものを峻別することである。この作業を可能にするのは、先述のイデオロギーの三つの機能である。少なくともそれらの機能の一つを果たしうる言説がエコロジズムの構成要素としての資格を付与されるのである。この作業の結果、どのような言説がエコロジズムに包含されうるものとしてドブソンによって認定されたかを理解するためには、緑の思想に関するアンソロジーとして彼が編集した書物<sup>(10)</sup>に収録されている文献を参照することが有益であろう。

## (2) イデオロギーの同一性とその内部における差異

エコロジズムの構成要素たりうる言説を認定した後に課題となるのは、それらを相互に関連づけながら、イデオロギーとしての同一性と統一性を確立することである。考察対象や考察方法を異にする多様な言説を、それらの差異にもかかわらず一つのイデオロギーを構成するものとして関連づける必要がある。その場合の基準となるのもまたイデオロギーの三つの機能要件であり、エコロジズムの構成要素である言説は、これらの機能との関連で編成されるのである。その時、ある言説は特にある特定の一つの機能の周辺に位置づけられるであろうし、またあるものは三つの機能全ての周辺に存在するであろう。この過程で、エコロジズムの構成要素たりうるものとされていた言説をさらに絞り込む作業がなされ、幾つかの言説は最終的に資格を剥奪されることになる。『緑の政治思想』におけるドブソンの中心的な課題は、この構成作業を遂行することによって、エコロジズムを明確に提示することにある。彼は『緑の政治思想』第一章「エコロジズムに関する考察」において、エコロジズムの全貌を大枠で示し、それ以下の二、三、四章でより詳細な個別的検討を行っているのである。

こうしてエコロジズムのイデオロギーとしての同一性を提示した後で問題となるのは、同一のイデオロギー内

部における差異である。非厳格主義者は、エコリズムと環境主義の差異をこのレベルで捉えていたが、ドブソンは環境主義をイデオロギーとは認めないので、彼がこのレベルで問題にするのは、エコリズムというイデオロギーとしての同一性に内包されるに至った言説の間の差異である。エコリズムの構成要素であるとはいえ、言説の多様性は依然として存在しており、時にはそれがイデオロギー内部での矛盾や対立として現れることになる。例えば、彼が提示している幾つかの論点を挙げれば、それは、ディープ・エコロジー内部における内在的価値論の立場とエコロジカルな意識を強調する立場との対立であり、また、人間中心主義に関する解釈をめぐるディープ・エコロジーと社会的エコロジーとの対立といった問題である。

ドブソンは、まずイデオロギー内部に存在するこうした差異を同定した上で、特に重大な矛盾や対立に関しては彼独自の視点からそれらを解決することによって、エコリズムを致命的な破綻を内包することのないイデオロギーとして最終的に提示することを目指している<sup>(11)</sup>。

### (3) イデオロギーの間の差異

このレベルで問題とされるのは、異なったイデオロギーの間の差異である。環境主義とは異なりイデオロギーとしての資格を獲得したエコリズムのみが、このレベルで、他の既存のイデオロギーと、比較・検討されることになる。そうした検討によって、エコリズムのイデオロギーとしての新奇さ、特異性がより明確にされるであらうし、加えて、エコリズムと他のイデオロギーの異種交配の結果、両者が共に修正を余儀なくされる可能性もあるであらう。ドブソンは、『緑の政治思想』「第五章 エコリズム、社会主義、フェミニズム」において、文字通り社会主義及びフェミニズムとエコリズムの比較・検討を行っている。『緑の政治思想』第三版では、第五章が改訂されており、社会主義、フェミニズムに加えて、自由主義、保守主義との比較も付加されている<sup>(12)</sup>。

エコリズムの理念型を構成する作業は、「イデオロギーとイデオロギーたらざるものとの間の差異」及び「イ

デオロギーの同一性とその内部における差異」のレベルで進められており、そうして出来上がった理念型を用いて、さらに「イデオロギーの間の差異」のレベルでの検討が行われている。こうした検討を経る中で、封建社会を否定しながら登場した資本主義、資本主義を乗り越えるべく登場した社会主義、そして両者は対立しつつも産業主義という共通の超イデオロギーに立脚するとして批判し、永続可能な社会に向けての転換を目指すエコロジズムといった図式が明確にされていく。かくして、近代社会を産業社会として規定し、批判するエコロジズムの、思想的挑戦の意味が強調されるのである。ドブソンがイデオロギー研究という文脈でエコロジズムを取り上げた理由は、「過去二、三百年の間公的生活を支配してきた政治的、社会的、科学的合意に対する一つの挑戦である」という意味での緑の政治の歴史的重要性<sup>(13)</sup>を明確にし、強調する点にあったと言えるだろう。

#### 四 エコロジズムと緑の政治

政治的イデオロギーとしてのエコロジズムの理論的な意味は上述の通りであるが、それは同時に緑の政治にかかわる実践上の意味も有している。『緑の政治思想』初版が著される文脈としての緑の政治の状況という観点から、ドブソンの意図をここでは検討することにしたい。この状況は、現在ではより顕著になっているように思われるのであり、その意味で、『緑の政治思想』が有する政治的実践上の意義はいささかも色あせてはいないと言えるであろう。

エコロジー問題への関心は、一九七〇年代に公害（汚染）問題や自然破壊問題をめぐって急速に高まり、先進国において多くの環境関連の法律が制定されると共に、エコロジー問題を担当する専門の官庁として環境省（庁）も設立された。しかし、こうした法や行政による一定の対応がなされたこと、さらに、二度の石油危機を経る中

で、各国の関心が不況や低成長に関する経済問題へと移行したことなどが相俟って、エコロジー問題への関心は後退していく事となった。そうした中八〇年代後半に、フロンガスによるオゾン層破壊問題や二酸化炭素を中心とする温室効果ガスによる地球温暖化問題（気候変動問題）などのいわゆる地球環境問題が急速にクローズアップされ、世界的に多くの人々の関心を集め、また国際政治の場で交渉が進められることになった。我々がまず確認しておくべきことは、ドブソンの『緑の政治思想』初版が公刊された一九九〇年という年は、七〇年代の関心の高まりとの対比で第二次環境ブームとも呼ばれたものが、その頂点に達していた時期にあたるということである。このような時代背景との関連を抜きにして、同書について語ることはできないであろう。

実際ドブソン自身、このような環境問題に関する急速な関心の高まりについて、以下のような事例を挙げている<sup>(14)</sup>。タイム誌は一九八八年の新年号において、表紙に掲げる恒例の「今年の人物」の写真を地球の写真に代え、環境問題の特集を組んだ。一九八八、八九年に世界各地で発生した大規模な自然災害と異常気象を人々は環境問題として受け取った。湾岸戦争を多くの人々が環境破壊という観点からも憂慮した。こうした関心の高まりは、環境団体への加入者の急増という現象となって現れた。さらには、環境主義者をそれまで一貫して敵視してきたサッチャー首相でさえ、一九八八年九月の英国学士院での演説において、自ら環境派に転じることを表明し、保守党自体も人間は地球の主人ではなく召使いであると言った。緑の消費者運動の華々しい展開や地球環境問題に関して次々と開催される国際会議が、人々の注目を集め、一九八九年の欧州議会選挙では、緑の党が議席数を伸ばす結果となった。

こうして環境問題に関心を持つことが、今や市民の、企業や消費者の、そして政治家の常識となりつつある。心ある市民はリサイクルを心がけ、企業は環境に優しい製品を販売し消費者はそれを率先して購入する。政治家や官僚は、国内政治及び国際政治において多くの環境問題に取り組み、対策を講じる。これらは、緑の政治が舞台中央で重要な役割を演じ始めたことを示しており、その結果地球環境問題を始めとする様々な環境問題の解決

に向けての大きなうねりが生じていることを意味するように見える。

しかし、ドブソンはこのような解釈を退ける。むしろ彼が強調したいのは、ある意味で誰もが環境問題について語りまた何らかの行動を起こすようになるにつれ、かえって緑の政治の本質が曖昧になるという逆説が生じているのではないかという疑問である。環境問題に関心を持ち行動を起こすことは、緑の政治の必要条件ではあるにしても、それは必ずしも十分条件ではない。したがって、環境にかかわる関心や行動であるなら、それらは全て緑の政治の構成要素であり、環境問題の解決を促進するはずだという結論を直ちに導き出すことはできない。

それゆえ、ドブソンは、環境問題の根本的な解決をもたらすものとしての「真の緑の政治 (dark-green politics)」と、その根本的な解決をかえって遠ざけてしまうような「表層的な緑の政治 (light-green politics)」とを区別しようとする。そして両者を区別するための基準を、それらが依拠する思想的基盤に求めようとする。ここから、エコリズムと環境主義を区別する必要が生まれている。こうした区別を設けることによって、ドブソンは八〇年代後半から緑の政治が舞台中央に進出したように見えるにもかかわらず、実際は緑の政治にとって状況が好転しているとは必ずしもいえないことに注意を喚起しようとしている。むしろ急速に影響力を増しているのは、環境主義に基づく「表層的な緑の政治」であって、そのことによって、かえってエコリズムに基づく「真の緑の政治」は後退しており、その結果環境問題の根本的な解決はむしろ先送りされているのではないかというのが、彼の状況認識であるといえよう。

ドブソンが環境主義とエコリズムとを明確に区別し、エコリズムが有するラディカルさを明確にすることに固執するのは、このような緑の政治の状況を変えようとする意図があるからであり、環境主義とエコリズムの区別は、このような実践上の意味を持っているのである。

## 五 おわりに

ドブソンは、改良主義的な立場の環境主義を批判し、近代社会に対する根本的な挑戦を内包するエコロジズムの立場を一つの独立した政治的イデオロギーとして確立することを目指していた。その試みが有するポジティブな側面は以下のようなものであろう。

第一に、それは、エコロジー問題が、産業社会としての近代社会がもたらす単なる偶然的な副産物ではなく、その社会が必然的に生み出し、人類や自然の存在基盤自体を破壊しかねない根本的な問題であることを明らかにしている。したがって、その問題の解決のためには、個々の問題に対する対症療法的取組みでは不十分であって、産業社会の枠組みそれ自体の改革が必要であることを明らかにしている。エコロジズムの問いの射程は、近代社会の根本的再検討を含むものであること、ゆえに、緑の政治の理論上、実践上の意義を過小評価してはならないことを明らかにしたと言えよう。

第二に、エコロジズムをイデオロギーとして取り上げたことによつて、包括的な視座を開くことができたという点を指摘しうる。イデオロギーというものは、政治、経済、法、倫理、認識論など多様な視点を包含するものであり、そうしたイデオロギーとしてエコロジズムを分析したことは、エコロジズムが同様に多様な包括的視座を有することを明らかにしている。学問の専門化・分業化自体がエコロジー問題の原因の一部をなしていることからしても、この点は重要である。こうした包括性を内包する分析として、政治的イデオロギー研究あるいは政治理論が果たすべき役割を示したと言えるだろう。

だが、ドブソンの分析は、我々に一つの有力な分析視座を提供したと同時に、それが孕む問題点、課題をも提示しているように思われる。イデオロギーとしてエコロジズムを構成し、それに立脚して現代社会を批判するというその思想的構えの妥当性が問われなければならない。エコロジズムが環境主義と異なるのは、そのラディカ

ルさにあるとドブソンは言う。ある意味ではそうである。しかし、人間の条件としての「真理」を提示しその観点から既存の社会を批判し、次いで来るべき将来の理想の社会像を描き、さらにその社会への移行のための戦略を提示するというイデオロギーの三つの機能を果たすものとしてエコロジズムを提示する時、それはあまりに近代的な政治的構想に立脚したものではないだろうか<sup>(15)</sup>。既存の社会の全否定と来るべき社会の全肯定という組み合わせと前者から後者への移行としてのある種の「革命」、抑圧するものと抑圧されるもの（本来性を喪失しているもの）という組み合わせと権力関係の逆転による後者の「解放」、このような図式がエコロジズムにもそのラディカルさを保証している。

しかし、エコロジズムが真にラディカルなのだとすれば、それはこうした近代の政治的構想に対する批判をも内包していなければならないであろう。そして実際、社会運動としての緑の運動あるいは（少なくとも初期の）ドイツ緑の党の実践は、そのような意味でのラディカルさを内包していたように見える。ドブソンの解釈においては、新しい社会運動に対する評価が低い<sup>(16)</sup>、以上のような面が見えにくくなっているが、緑の運動や緑の党の実践は、ドブソンがいう意味での政治的イデオロギーであることを拒否していたように見えることの意味を今一度検討する必要があるだろう。そうすることによって、移行戦略というものが、理想の社会に向けての単なる経路・手段ではなく、それ自体が目的を孕み、それ自体が自由の行使であるような過程として把握されるようになるであろう<sup>(17)</sup>。

註

(1) 例えば、Andrew Heywood, *Political Ideologies: An Introduction* (Macmillan, 1992)において、第八



章「環境主義」に於いて Roger Eatwell and Anthony Wright ed., *Contemporary Political Ideologies* (Pinter Publishers, 1993) に於いては「第一〇章 エコロジズム」(この章の執筆者はイブ・ヘン・ド・モル) において Robert Eccleshall ed., *Political Ideologies: An Introduction*, 2nd ed. (Routledge, 1994) に於いては「第八章 エコロジズム」に於いて Terence Ball and Richard Dagger, *Political Ideologies and the Democratic Ideal*, 2nd ed. (Harper Collins, 1995) に於いては「第九章 緑の政治——イデオロギーとしてのエコロジー」に於いて Andrew Vincent, *Political Ideologies*, 2nd ed. (Blackwell, 1995) 重森臣広訳『現代の政治イデオロギー』(昭和堂、一九九八年) に於いては「第八章 エコロジズム」において、さらに Robert Leach, *British Political Ideologies*, 2nd ed. (Prentice Hall, 1996) に於いては「第一〇章 緑のイデオロギー」において、それぞれ環境にかかわる言説が政治的イデオロギーとして検討されている。

- (2) 原著は以下の通りである。
- Adrian Atkinson, *Principles of Political Ecology* (Belhaven Press, 1991).
- Robyn Eckersley, *Environmentalism and Political Theory: Toward an Ecocentric Approach* (State University of New York Press, 1992).
- Robert Goodin, *Green Political Theory* (Polity Press, 1992).
- Tim Heyward, *Ecological Thought: An Introduction* (Polity Press, 1994).
- John Dryzek, *The Politics of The Earth: Environmental Discourses* (Oxford University Press, 1997).
- Douglas Torgerson, *The Promise of Green Politics: Environmentalism and the Public Sphere* (Duke University Press, 1999).
- Alan Carter, *A Radical Green Political Theory* (Routledge, 1999).
- Brian Baxter, *Ecologism* (Edinburgh University Press, 1999).
- John Barry, *Rethinking Green Politics: Nature, Virtue and Progress* (Sage Publications, 1999).
- James Radcliffe, *Green Politics: Dictatorship or Democracy?* (Macmillan Press Ltd, 2000).
- 緑の政治理論とかなる論集として、Andrew Dobson and Paul Lucardie eds., *The Politics of Nature: Explorations in Green Political Theory* (Routledge, 1993), Freya Mathews ed., *Ecology and Democracy* (Frank Cass, 1996), William M. Lafferty and James Meadowcroft, *Democracy and Environment: Problems and Prospects* (Edward Elgar, 1996), Brian Doherty and Marius de Geus eds., *Democracy and Green Political Thought: Sustainability, Rights, and Citizenship* (Routledge, 1996) などがある。さらに、この本に於いて、エコロジー問題と民主主義の関係を扱っている。

最後に、八〇年代に公開された緑の政治理論にとって重要であると思われる著作として、John Dryzek, *Rational Ecology: Environment and Political Economy* (Basil Blackwell, 1987) 及び Robert Paehlke, *Environmentalism and the Future of Progressive Politics* (Yale University Press, 1989) を挙げておきたい。

- (3) ドブソンの『緑の政治思想』には、三つの版がある。Andrew Dobson, *Green Political Thought* (Harper Collins, 1990) が初版であるが、その後 Routledge 社から、一九九五年に第二版、二〇〇〇年に第三版が出版されている。内容はその都度部分的に改訂されている。本稿は基本的に、邦訳のある第二版、すなわち、Andrew Dobson, *Green Political Thought*, 2nd ed. (Routledge, 1995) (以下、GPTと略記) 松野弘監訳、栗栖聡、池田寛二、丸山正次訳『緑の政治思想——エコロジズムと社会変革の理論』、ミネルヴァ書房、二〇〇〇年) に基づいている。

- (4) GPT, p.1. 邦訳一頁。

- (5) 以下のドブソンのイデオロギーに関する議論については、『緑の政治思想』「序論」及び「第一章 エコロジズムに関する考察」の冒頭部分を参照せよ。

- (6) ドブソンは、『緑の政治思想』「第一章」で、エコロジズムの根本的教義及びその特徴を一挙に提示することによって、イデオロギーとしてのエコロジズムの概要をまず描き出している。

- (7) GPT, p.1. 邦訳一、二頁。

- (8) GPT, pp.2,3. 邦訳三頁。

- (9) ドブソンのこうした主張を比喩的に言えば、以下のようなになるだろう。つまり、環境主義は、個々の環境問題を個別的に処理・解決しようと試みるものであり、それはいわば病気の症状を病気それ自体と取り違えて治療を試みることに帰結し、ゆえに対症療法を繰り返すほかない。他方でエコロジズムは、それらの症状を生み出している病気の原因それ自体を認識しており、それに対する根本的治療を試みるものであるから、社会に真に健康な状態をもたらすことができる、というものである。こうした指摘は重要であるが、ただ両者の関係については慎重に検討する必要があるだろう。この問題について、ドブソンは『緑の政治思想』「終章」において、検討を加えている。

- (10) Andrew Dobson, ed., *The Green Reader* (Mercury House, 1991) 松尾真、金克美、中尾ハジメ訳『原典で読み解く環境思想入門』(ミネルヴァ書房、一九九九年)。同書においてドブソンは、緑の批評、緑の社会、緑の経済、緑の政治戦略、緑の哲学という分類の下に、エコロジズムに帰属すると見なされた五四の書物の抜粋を収録している。それらの著作の多くが実際『緑の政治思想』において参照されている。

- (11) このレベルでの分析としては、前掲のバクスター『エコロジズム』があり、同書においては、理論、道徳、政治、経済にかかわる包括的なイデオロギーとしてのエコロジズムが提示されている。
- (12) このイデオロギー間の差異のレベルでの分析としては、前掲のエッカードスレー『環境主義と政治理論』が、先駆的な取り組みである。彼女は、同書において、エコ中心主義的視点から、批判理論、エコ・マルクス主義、エコ社会主義、エコ・アナーキズムを批判的に検討している。
- (13) GPT, p.11. 邦訳一頁。
- (14) Andrew Dobson, *Green Political Thought* (Harper Collins, 1990) の序論を参照。これらの記述は、第二版以降削除されている。
- (15) ただドブソン自身、イデオロギーを機能要件という観点から規定するアプローチは、イデオロギー研究というより広い文脈においては、批判の対象となりうることを十分に自覚している。(GPT, p.13. 邦訳一八頁参照)
- (16) GPT, pp.156,157. 邦訳二二八、二二九頁を参照せよ。
- (17) 近代の政治的構想としての「革命」、「解放」といった図式の問題点及び新しい社会運動が有するそうした図式に代るラディカルさについては、Michel Foucault, "La Philosophie analytique de la politique," in M. Foucault, *Dits et Écrits*, Tome III (Gallimard, 1994) 渡辺守章訳「政治の分析哲学」(『シニエル・フーコー思考集成Ⅶ』(筑摩書房、二〇〇〇年) 所収) 及び Michel Foucault, "Sujet et pouvoir," in M. Foucault, *Dits et Écrits*, Tome IV (Gallimard, 1994) 渥海和久訳「主体と権力」(『思想』一九八四年四月号、岩波書店) さらには栗栖聡「第四六章 フーコー——権力ゲームの分析学」(藤原保信、飯島昇蔵編『西洋政治思想史Ⅱ』(新評論、一九九五年) 所収) を参照せよ。

(二〇〇三年九月三〇日受理)